

## 巻頭言

今年度の最も大きな出来事は、令和六年一月一日に起こった千年に一度といわれる能登半島地震に他ならないでしょう。まさか元旦にこのような惨事が起こるとは誰が予測できたでしょう。被災された皆様にお見舞い申し上げるとともに、ご支援くださった教職員に心から御礼を申し上げたいと思います。その後の大学の体制、方針、実践に関しては教職員の知るところであります。

そして、学長として教職員に出したメッセージは、以下です。

「どんな危機状況に社会が置かれても、教育・研究を止めてはいけません。未来を創る人材を育成することが、復興につながる最も大切な手段だからです」

まず教育において、この令和5年度には、我々はどうのような次世代を担う学生を育ててきたのでしょうか。それは、Society5.0時代／ポストコロナ・災害時代の新たな医療に対応し先導できる、**情報リテラシーと自律性、他分野と融合する探究力**を備えた“次世代看護職”の育成です。令和4年度から学年進行で始まった教育のDX化に向けての学内実習をソフト、ハード両面から整備してきました。また、グローバル化を担う国際研修を再開するための準備を進めるとともに、受験生増を目的に高校大学間連携のシーズ集を作成し、オープンキャンパスではミニレクチャーを開催するなど、多くのチャレンジをしてきました。

一方、研究はどのように進化したのでしょうか。研究の成果が論文として発表され、社会に還元されてこそ、科学は進化していきます。本学からも今年度は多くの論文が発表されました。また、文部科学省（学術振興会）の科学研究費助成事業の採択率が41%に達したことは最大の成果でしょう。現在の日本では、全大学の三分の一が看護学部または看護学科を有する、あるいは学部があり、そのほとんどが修士課程を持ち、さらに二分の一が研究者を養成する博士課程を開講しています。その中で本学は、研究の面でも他学をリードする存在となることを目指しています。「未来の看護を創る研究者は育っているのか？」これは、以前より看護学に対して他領域の科学者達からの投げかけられている問いです。実践科学である看護学の未来を創るために、発表されたみなさんの研究が現場に繋がり、評価されることと確信しております。

さらに本学は、看護系大学として唯一の産学連携講座を開設するに至りました。共同研究講座「看護理工学」には分子生物学や栄養学を専門とする教員を迎え、単科大学でありながら文理融合による研究が進められることを期待しています。

最後に県立大学としての地域貢献では、地域ケア総合センターがeスポーツで高齢者の認知機能の改善を目指すプロジェクトをかほく市と共同で実施し、大変有意義な結果をもたらしました。さらに、看護キャリア支援センターは、特定行為研修を含めた皮膚・排泄ケア認定看護師教育課程（B課程）の実施施設として厚生労働省と日本看護協会から認可をいただきました。こうした取り組みは、石川県の保健医療水準を高め、また次世代の看護のリーダーとなる人材の育成に繋がることでしょう。

来年度は、本年度の実績と成果を基盤として、次世代の看護を創生しつつも、目の前の能登半島地震の復興を支援できる、災害に強い看護大学を目指して、All IPNUで最善をつくして参りましょう。

石川県立看護大学 学長 真田弘美